

お忙しくても、約2分間で読めます

山内公認会計士事務所

ハートフル・ワード (心からの言葉)

TEL 098-868-6895
FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

元気な会社は「正しい、正しくない」を真正面から議論する

三枝 匡 (ミスミグループ本社シニアチェアマン)

1. 日本人がバブル破綻で谷底に落ちてから間もなく30年。1人当たりGDP(国内総生産)は世界26位に落ち、国の借金も危機的だ。世界的な競争で後れをとり、欧米や中国に追いつきようもない企業や分野が増えた。しかしそんな低迷にもすっかり慣れ、こんなもんだと思っている日本人が多い。
2. 大企業は簡単に倒れるものではない。おかしな経営でも十年単位で生き延び、その間に病気が進行し、最後に「死の谷」の崖っぷちに行き当たる。そこでも経営者が無策なら、さらにしばらく走り回った後、死の谷に落ちてオワリになる。経営が行き詰まった当時のシャープ、ダイエー、日本航空、日産自動車などに共通するのは、幹部が業績後退に慣れっこになり、抜本改革を先延ばししたことだ。
3. そのような企業は、恥ずべき業績なのに社員の危機感は驚くほど低い。そういった会社の特徴として社内にはまさに「政治性」のるつぼだ。元気な会社なら「正しい、正しくない」を真正面から議論するが、政治性の強い人々は裏口から出入りする。夜は必ず誰かをやり玉に挙げ、グチと陰口をさかんにして飲む。昼間に「青臭い正論」を戦わせない会社に、よみがえるためのリスク戦略をまとめ上げ、実行に移すことなどできない。

(参考:「日経ビジネス」2020年1月27日号)

海外事情

今後の世界経済を索引するA(アフリカ)とI(インド)
ジム・オニール

(英王立国際問題研究所会長・BRICsの造語者)

1. 2000年代初頭に私が「BRICs(ブラジル、ロシア、インド、中国の4ヶ国)の経済見通しを公表し始めた当初から、中国がいずれ頭打ちになることは見えていた。2010年代初頭までに労働人口が減少し始め、経済に下押し圧力がかかるようになるのは当時からはっきりしていた。
2. 反対に2020年代の世界経済にとって、最大の牽引役となる可能性を秘めているのがインドだ。政府が適切な改革を行うのであれば、成長率を8~10%に高めるのは何ら難しくない。しかしインドはすでに世界第5位クラスの経済規模を備えている。もう1つ期待できるのがアフリカだ。国別に見れば取るに足りないが、大陸として見ればアフリカの経済規模はインドに迫る。

(参考:週刊東洋経済:2020年2月8日号)

心・健康・環境について

芸術的活動が寿命を延ばす

1. 英国では2002年から50歳以上の男女を対象に、社会生活と健康の関係を調査する「ELSA(平均年齢65.9歳、女性53.6%)」を行っている。昨年末の報告では、美術館やコンサートに行くといった「芸術的な活動」に接する機会が多いほど、死亡リスクを減らす可能性が指摘された。
2. また、学歴がなく、経済的に恵まれていない、調査時に無職、未婚(あるいは独居)、無趣味、親しい友人が少ない、地域のコミュニティ活動に参加したことがないなど、孤立につながりやすい要因も死亡リスクを高めることが示されている。研究者は「ストレス解消や創造性を育むことでさまざまな不都合にも柔軟に適応できるのでは」と考えている。

(参考:「週刊ダイヤモンド」2020年2月1日号)

古典に学ぶ

人の差異は甚しい

(解説)人は万物の靈長であるということは、人皆みずから信じておるところである。同じ靈長であるならば、人々相互の間におけるなんの差異なかるべきはずなるに、世間多数の人を見れば、上を見るも方図がなく、下を見るも際限なしと云っている。現に我々の交際する人々は、上王公貴人より、下匹夫匹婦にいたるまで、その差異もまた甚しいのである。

(参考:渋沢栄一「論語と算盤」:国書刊行会)